



中性子星／*Neutron Star*(1968)／ラリイ・ニール（小隅黎訳）／川書房（文庫・7/31刊・¥520）

本書はニーヴンにとって処女短編集にあたり、ヒューゴー賞受賞作「中性子星」を含む八つの中・短編が収められている。これで、ノウン・スペース・シリーズの短編は、大半が訳出されたことになる。あとは、シリーズに入るとはいえ、ジル・ハミルトン物のミス・テリ風SFが、残されているくらいだ。

六六年から六八年までの、ニーヴン初期作ばかりである。しかし、この段階で、著者の作風が確立していたことが、よくわかる。出世作「中性子星」以降、主人公が偶然、儲け口にありつき、えたいの知れない惑星や物質、生き物と出会い、最後にオチがつくといったパターンが、どれだけ繰り返されてきたことか。だが、これは、批判されるべき特質ではないだろう。ほめられるにせよ、腐（くさ）されるにせよ、ニーヴンで問題になるのは、結局アイデアだ。どれくらいの切れ味が、作品に込められるのかが、命とっていい。その点、本編は、後期に至るほど、技法は向上しても、覇気がしだいに失せていったシリーズの中で、雑音の少ない若々しさ（ノウン・スペースに登場する、主な異生物も、ほとんど出ている）に溢れる好作品集だろう。（俊）